

# 論文内容要旨

Study of factors related to  
the reflection abilities of dental trainees  
(研修歯科医の省察能力に影響する因子の検討)

主指導教員：栗原 英見教授  
(応用生命科学部門 歯周病態学)

副指導教員：加藤 功一教授  
(基礎生命科学部門 生体材料学)

副指導教員：高田 隆教授  
(基礎生命科学部門 口腔顎顔面病理病態学)

大戸 敬之

(医歯薬保健学研究科 医歯薬学専攻)

## 【背景】

省察は、歯科医師に必須の臨床能力の1つであり、研修歯科医が研修期間中に修得すべき重要なアウトカムである。行為における省察のプロセスは、行為中の省察、行為後の省察があり、これらが次の行為のための省察を促すといわれている。この中の行為後の省察は、Kolbらは経験学習サイクルの重要なステップの一つであると、また Schön は、省察的实践家には行為後の省察によってネットワーク化された事例（知識）の蓄積が未知の状況に対する先例や範例となると述べている。このような歯科医師のメタ認知に極めて密接に関与していると考えられる省察能力は、経験や体験による行動主義や認知主義的学習よりも、むしろ学習や職場の環境から協動的に学ぶ社会構成主義的学習や、学習者と関係する他者との相互的学び合いである正統周辺型学習によって培われるのではないかと考えられる。

さて、患者中心の Evidence Based Dentistry を提供する第一歩を歩み始めた研修歯科医にとっては、卒前に学修した基本的な省察を臨床現場での経験を通じてクリティカルやロジカルな省察へと変容させていくことが求められている。本院では、その省察のトレーニング手法として Significant Event Analysis (SEA) を応用したカンファレンスを実施している。

そこで本研究では、よりよい研修プログラム構築や、学習単位としてのチーム構成に役立てるため、研修歯科医の省察能力に対して影響を与える因子について検討を行った。

## 【対象及び方法】

2012-2013 年の広島大学病院研修歯科医の 35 名について、臨床研修開始期および修了期において一人 3 分程度の SEA カンファレンス方式の口頭プレゼンテーションを実施し、その逐語録を作成した。研究 1 では、本集団の省察の特徴を把握するため、省察深度の評価を行った。評価法は O' Sullivan の Reflective ability rubric and user guide に基づき 0-6 点の 7 段階で点数化した。この省察深度と研修歯科医の背景的要素（性別、出身大学、国家試験受験回数、進路）や環境的要素（外部研修の有無）との検討を行った。さらに 1 年の研修期間を 1-4Q の 4 期に分けた上で、13 名分の中間期の検討も加えた。研究 2 では、個々の逐語録について合目的なサンプリングを実施し、その内容を Steps for Coding and Theorization (SCAT) による質的分析を行った。

## 【結果】

研究 1 では、開始期から修了期の省察深度は平均値で 3.17 から 3.43 へと上昇したが、有意差は認めなかった ( $p=0.12$ )。また、省察深度が上昇した群は 15 名、同値群は 12 名、下降した群は 8 名であった。各群の開始期の平均値は、上昇群が 2.8、同値群は 3.17、下降群が 3.88、修了期では、上昇群が 3.93、同じ群は 3.17、下降群は 2.88 であった。一方で、研修修了期の省察の深度と研修歯科医の背景的要素や環境的要素について重回帰分析を用いて検討した結果、背景的背景よりも、環境的要素に有意差が認められた。( $p=0.024$ )。平均値の年間推移としては、1Q (3.10) から 2Q (2.75) に低下し、その後 3Q (3.44) と大きく上昇し、4Q (3.31) となった。1Q および 4Q は、全体の平均値と概ね一致していた。また、4 期の中では、2Q-3Q 間に有意差が認められた ( $t=2.83$ ,  $p=0.02$ )。

研究 2 での SCAT による分析の結果、全体の理論記述は【スタッフの一員】、【指導歯科医と

の関係】，【診療の専門性】，【不足の自覚】の4つにカテゴリー化された。【スタッフの一員】では、研修歯科医が状況に溶け込むように努力しながら場に持続的に参加度を増加させ、他のスタッフとの関わりの中から学びを得ていた。【指導歯科医との関係】では、指導歯科医からの言葉によって研修歯科医は学びを理解し、成長を自覚した。そして指導歯科医（術者）視点への移行・転換、認知が起こることで、学びを自分のものとしていた。【診療の専門性】では、一般ではない特別と感じる診療を目の当たりとすることにより、学びを得、次への経験への欲求が増加していた。【不足の自覚】では、研修歯科医の内部で生じたネガティブな反応（思い）がモチベーションの向上、そして深い省察へと繋がっていた。また、2Qの省察深度が低い逐語録では、『慣れる』ことへの『苦しみ』という構成概念が創出されたが、この『苦しみ』の時期を乗り越えた3Qでは、主体的学習の機会が増えるにつれてクリティカルな深い省察が行われるようになっていた。

#### 【考察】

認知的徒弟制度的な学習（実践）共同体では正統周辺型学習が行われ、研修歯科医は主体的体験や経験による気づきと深い省察を促される。そして、この気づきと省察の積み重ねが深い省察を行う能力の醸成へとつながっていると考えられる。本研究対象集団の省察深度については、研修開始期と修了期での差は少なかったが、これは開始期の省察深度の値が先行研究と比較して高いため増加量として表れ難かったと考えられる。一方で、出身大学間や男女間で省察深度の増減に差がなかったことは、学士課程の省察に関わる教育の成果の現れではないかともいえる。また、省察深度の上昇と環境の要素との関連が認められた理由としては、研修歯科医は省察の実践家として歩み始めたばかりであり、個人の背景よりも、その後の正統周辺型学習的な学習環境に左右される方が大きいためであると考えられる。しかし一方で、研修歯科医の『慣れる』という『苦しみ』を覚えていた2Qでは、テキスト中の「基本的なことができてから」、「一つ一つ確実に」と『焦燥感』との葛藤や『自戒』が【不足の自覚】としてあらわれ、次の3Qでの主体的学習の増加が【スタッフの一員】，【診療の専門性】という『成長への実感』や『成長への継続の意欲』へとつながり、深い省察をもたらしたと考えられる。つまり『苦しみ』を乗り越えることによって、自己のアイデンティティから歯科医師としてのアイデンティティが形成され、医療プロフェッショナルアイデンティティの成長へ第一歩を踏み出していくことになる。まさに指導歯科医には、研修歯科医が効果的に学習のできる認知的徒弟制度の学習（実践）共同体（Inter Professional Work）として機能させるために、【指導歯科医との関係】構築というロールモデルとしての役割とともに、深い省察を促すための学習支援が求められているといえる。

#### 【結論】

本研究で、研修歯科医の省察能力へと影響する因子が明らかとなった。本結果は、研修歯科医が効果的に学びを得る状況の理解へと繋がり、今後の歯科医師臨床研修プログラムの改善やより効果的な学習方略の立案へ有用であると示唆された。